

## 寺川俊昭著『親鸞の信のダイナミックス』

―往還二種回向の仏道―書評

石田 慶和

本書は、二種回向の思想を中心として、『教行信証』のオリジナルな思索を明らかにしようとしたものである。この場合「オリジナル」という言葉には、「独創的な」という意味と、「もとの、本来の」という意味との両方が含まれる。その点に、すでに本書の基本的な立場と特色が見られると言つてよいであろう。すなわち著者は、本書において、従来の理解をふまえつつも、あらためて親鸞の思想の本来の意味を検討することを通して、その独自性を明らかにしようとするのである。

二種回向すなわち往相・還相の回向については、親鸞思想の中心的主題として、従来から多くの研究者によつて説明されているが、それが必ずしも十分ではなく、むしろその本格的な研究はこれからではないか、というのが著者の考えである。そのことを論じるために、著者はそれについての代表的ないくつかの見解を紹介し、批判する。また最近、ことに還相回向について、それを真宗における社会的実践の原理とみようとすると関心から、現世におけることとして理解しようとする見解が見られるが、そうした考えについても著者は批判的である。このような問題意識を基礎として論述が展開し、著者自身の見解が明らかにされる。以下、そ

の要旨を見てみよう。

序章「信念のダイナミックス」においては、先ず著者が多年研鑽を積んできた清沢満之の信念と思想について論じられる。それが還相の回向についての伝統的な理解、ならびに最近の理解についての本論における著者の問題提起の前提となっている。

清沢については、その信念の確立は明治二十八年の垂水療養中であつたとふつう考えられているが、著者はそれに賛同せず、それより後の明治三十一年、「エビクテタス氏教訓書」と「阿含経」と「歎異抄」の身読を通して開き得た「乗托妙用」の自覚のときとする。それは、「乗托妙用の自覚が自然に避悪就善の意志を生み、進んでその意志にしたがつて生きようとする意欲を呼び覚ます」と考えられるからであり、そこに清沢の信念の力動性がある、と著者は見る。そしてそれが、後に曾我量深が本願の信における願生心の重要性に着目し、「一心帰命の信は一心願生の信として相続し展開するとする」、「願生浄土の自覚道」こそ浄土真宗の積極性であるとするに至った端緒であると言う。この清沢―曾我と継承される「願生浄土の自覚道」に浄土真宗の力動性があるとする見解が、二種回向に關しての著者の理解の中心であり、書名の「親鸞の信のダイナミックス」もそれに基づいていると見てよいであろう。

こうした見解は、還相回向を、「肉体の命終のち浄土に往生し、やがて再び穢國に還來して行ずる利他行」とする伝統的な理解や、「信心をえた人が、如来の回向によつて往相道を究竟してゆくその歩みの上に、如来の回向によつて還相の普賢行が実現してゆく」とする最近の理解のいずれに対しても批判的な著者の立

場を明確に表している。後に明らかにされるように、著者によれば、伝統的な理解は、「二種回向はともに現生において自証される如来の恩徳」と見なければならぬことに反するし、最近の理解は、信念を確立してなお苦悩しなければならぬ凡夫の〈私〉であるという事実に対してあまりにも楽天的と考えられるからである。それでは還相回向とは何を言うのか。著者はこの章の最後に、曾我量深の「涅槃の多用たる還相の利他教化は遠き未来の理想であらうと思いきや、現に自己の背後の師父の發遣の声の上に既に実現せられてある」という言葉を引き、ここに還相回向の理解の道しるべを得ようとするのである。

本論第一章「二種回向の恩徳」においては、親鸞が明らかにした浄土真宗という仏道はどのような特質をもつかが論じられる。それを著者は、往相・還相という如来の二種の回向によって、衆生に教・行・信・証の四法が恵まれるという仏道であると理解する。その教行信証は、「流転する人生を転じて仏道」という意味をもった生を実現する自覚的契機である。従って「二種回向はあげて如来の恩徳であり、そこに恵まれる教・行・信・証はすべて衆生の分際」であるとされる。そこに、如来の恩徳としての二種回向と、その利益として衆生に恵まれる教行信証との二つの事柄が、区別されるとともに分かちがたく一体であるとする著者の独自の見解が示されている。

そうした見解は、著者が教行信証と切り離れた二種回向の理解や二種回向のみの理解、さらには往相・還相を衆生の生の二つの相と見るような理解をとらぬことに結びついている。往相・還相はあくまで如来の回向のはたらく相であって、そのはたらくきによ

って衆生に恵まれるものは、往相・還相の徳ではなくて教行信証という自覚的事実であるというのである。この点に著者の二種回向の理解の核心がある。

第二章「回向する願心」においては、その二種の回向の成立する根源としての回向する願心について論じられる。すなわち親鸞は、曇鸞の「論註」の導きによって、衆生を撰取る如来の願心は回向を首とし、またそれは往相・還相の二相においてはたらくことを学び知った、と著者は言う。そのことは、「二心一心問答」における如来の願心と衆生の信心とが一つとする親鸞の見解と結びつく。というのは、親鸞は欲生の願心を如来の回向心と理解する。欲生心とは、親鸞においては「我が国に生まれんと欲え」という招喚の勅命である。本願真実を信じその心をもつて浄土へ生まれんとおもえという願心が私の信心として回向されるのであり、その信が願生の信として生きられてゆく。その一心帰命の信の発起が、本願の名号においてあらわとなる回向の事実である。

そうした回向する願心のはたらきとして、衆生は正定聚に住する身となり、煩惱具足のまま無上涅槃に至る人生に生きるという願生浄土の自覚道に立つ。それが往相の回向である。また還相の回向のはたらきは、親鸞においては、願生の行者として生死出ずべき道にたつことを得しめた「よき人」法然に、大悲を行ずる浄土の菩薩の面影をみるということに具体化されるのである。そこに二種の回向の意味がある、と著者は言う。

第三章「往相回向」においては、あらためて往相の回向が論じられる。著者はここではじめに、それが諸仏称揚の願・至心信樂の願・必至滅度の願の三願によって成就された真実の行・信・証

をとおして衆生の上にはたらしき出ることを強調する。したがって往相の回向とは、この三願のはたらしきによって真実の信心に目覚め、現生に正定聚の身となって大般涅槃無上の大道に立つことのできたものが自証する如来の恩徳にほかならない、というのである。その往相の回向の内容として、二つのはたらしきがある。第一は功徳の回施であり、第二は願生浄土である。この場合、回施される功徳とは本願の名号にほかならず、その本願の名号に帰した自覚が信心である。また願生浄土は単に往生ではなく、現生に正定聚の身となることであり、そこに親鸞の往相回向の理解の特色があるという。

第四章「願生浄土」では、その現生正定聚の意味がさらに論じられる。正定聚とは、法蔵菩薩の功徳の回施によって本願の名号に帰入し、その回心懺悔において恵まれる真実功徳に立脚する生を言うのである。それは「かならず無上大涅槃にいたるべき身となる」ということであるが、そういう生とはどのような生き方なのか。それは浄土の功徳を自証する生であり、凡夫が煩惱に妨げられることなく無碍の一道に立つ生である。具体的に言えば、自信教人信の道を誠実に生きてゆく生き方であり、それが現生に正定聚に住した生なのである。そうした生を生きるものが願生浄土の自覚道に立つ者、即ち願生の行者と言えるであろう。「往生」とは、親鸞においては、このような仏願に乗じて生きる者に恵まれる新しい生を意味し、「願生」とはその往生の一道を主体的に生きることを意味する、と著者は言うのである。

第五章「二種回向についての種々の見解」においては、以上のような往相の回向の理解を受けて還相の回向について論じる前に、香月院深励、山辺習学・赤沼智善、星野元豊、武内義範、金子大

栄といった人たちの見解が検討され、その問題点とそれに対する著者の見解が示される。その要点は、諸師は①往相を往生浄土の相と理解し、また②往還二相を衆生の生と理解するが、親鸞の主張は、③如来の回向が往相・還相の二種の回向として衆生に現前するとし、④それは教行信証と深く関連し、⑤またそれによって実現するのは願生浄土の自覚道であるとする、と見るべきであるという五点に要約される。そうした理解の成立に導くものとして著者はとくに曾我量深が、如来の還相回向の恩徳を衆生の上に現前するものは「背後から自己を発遣する師の教え」であると言うことを顧み、そこに還相回向の理解の鍵を見いだすのである。

かくして第六章「還相の回向」において、「還相の回向を行ずるもの」、「還相の回向の内容」が問題になる。著者は、親鸞が浄土の往生をとげたものは必ず五濁悪世に還ってきて利他行を行ずるという確信をもっていたと考える。その利他行が還相の回向の内容であり、それは如来の恩徳にほかならない。しかしそれを誰が実現し、またその実現は来生なのか現生なのか。著者は、如来の恩徳は浄土の菩薩とも言うべき師主の教化によって衆生にもたらされ、したがってそれは現生に自証されるものであるという。通説では、衆生が浄土に往生し、無上涅槃を証してのち再び穢土へ還って他の衆生を済度すると理解されているが、親鸞の如来回向の思想に則るならば、そうした理解はとれぬという。

如来の二種の回向の利益として衆生に恵まれるものは、真実の教行信証である。即ち、真実教を説いて衆生に真実の行信を獲得させ、無上涅槃の大道に立たせ、さらには願生浄土の自覚道に立たせる。二種の回向とは、このような真実教との出遇いと、それに始まる自覚道とを生む根源を推究し自覚化した知見である、と

著者は見る。それ故、回向は如来に約して言い往還二相は衆生に約して言うとする伝統的な見解も、如来の回向によって往相・還相の徳を賜ふことを信じる身となるとする見解も、親鸞の教えに相応しない、と著者は主張するのである。

以上、往相・還相の二種回向についての本書の理解を要約したが、ここには、従来の理解に対する大きな問題提起があることは明らかである。往生浄土の相と、還来穢国の相とは衆生について言われ、その二種の相は如来の回向によつて成立するとする従来の基本的な理解に対して、ここではあくまで如来の回向そのものに二種の相があると見るところに理解の中心がおかれている。如来の恩徳のはたらきとして、教行信証として衆生に与えられる「往相の回向」と、師父として出遇われる浄土の菩薩による衆生の教化としての「還相の回向」との二種の回向がある、というのが親鸞の思想であるとされているのである。したがつて、二種の回向はあくまで現生のこととして理解される。そうした主張は、本書において十分説得的であると言えよう。それは、真宗学における定説にとらわれずに親鸞の教えを虚心に聞くという態度に基づくものであり、そこにおのずから新たな理解の展開が見られるのである。

それとともに、本書の問題提起は、現代の宗教的表象の理解の問題に深くかかわっている。往相は衆生の往生浄土の相、還相は衆生の還来穢国の相、その二つが如来の回向によつてめぐまれるとする理解は、浄土を現世を離れた理想的な彼岸と見て、そこへ衆生が往き還りをするという浄土教の伝統的な浄土表象と結びついている。古代や中世の世界表象とは全く異なつた世界表象をも

つ現代の人間には、そのような浄土観が受け入れにくいとして、そこに「往生」という表現をめぐつて現在多くの議論が展開していることは、あらためて言うまでもないであろう。そのことは、キリスト教における「神の国」の表象をめぐつて生じている議論と対応するものであろう。そうした問題は、多くの宗教的表象の意味が根本的に問われている今日の精神的状況を反映しているのである。

しかし、他面において、中世人である親鸞が浄土へ往生するということについても、また往生の後に現世へ還つて衆生済度のはたらきに参加するということについても、強い確信をもつていたと考えられることも否定できないように思われる。いくつかの消息の中に「かならずかならず一つところへまゐりあふべく候ふ」とか、「浄土にてかならずかならずまゐらせ候ふべし」と記しているし、また直接のものではないにしても、よく知られた『歎異抄』に「念仏して、いそぎ仏に成りて、大慈大悲心をもつて、おもふがごとく衆生を利益する」とか、「ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道・四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなり」といった言葉が残されていることから、そうした親鸞の浄土の見方というものがうかがわれる。こうした見方は『教行信証』に「論註」を引用して、浄土の菩提心が願作仏心・度衆生心であることを言うことと深く一致しているように思える。親鸞にとつては、浄土へ生まれてのち現世へ還つて衆生済度に参加するということは、決して夢物語ではなく、自らの師父との出遇いという経験からも感得できるひとつの動かしがたい事実であつたのである。

現代の人間にとって、浄土へ生まれるとか、浄土の菩薩が現世へ還ってくるといったことは神話的表现であると言われよう。しかし、神話的ということは決して幻想的とか、虚構的であるということを意味しない。むしろそこに、現代の人間が失ってしまつた深い宗教的なりアリティが語られていることが多い。それをいかに読みとるかが、現代における宗教的表現の根本的な問題であるとも言える。プラトマンの「非神話化」の提唱は、一般に誤解されるような神話の除去ではなく、神話の解釈であることはプラトマン自身がくりかえして言うところである。

そうした観点からすると、往相・還相の回向の理解についても、著者の強調する現生にかかわる面だけではなく、やはり来生に期待されるという面も見失われてはならないように思われる。著者のいう「願生浄土の自覚道」ということにも、浄土に生まれることを願うという未来的な契機が十分に生きているのではないか。それは還相ということも密接にむすびついているのではないであろうか。具体的に言えば、それは〈私〉を導いた師父の歩みと、いずれは同じ歩みに参じ得るといふ期待であり、そのこと自身が宗教的な生における大きな喜びでもあるのである。

宗教的な生においては、日常的な生とは異なつて、過去・現在・未来という時の契機が立体的に、またダイナミックにはたらく。はかり知れぬ過去から向けられてきた如来のはたらきが現に〈私〉を導いて新たな生を未来に開くという感慨は、親鸞の言葉の随所に見られる。往相・還相の回向という表現にも、そうした独自の時の受けとめ方がこめられていると見なければならぬ。如来の恩徳としての二種の回向ということとともに、その回向のはたらきに乘じた〈私〉の生ということもそこには表現されているので

ある。そうした理解が、親鸞の二種の回向の思想の現代における意味を一層明らかにするのではないであらうか。著者の提起する往相・還相の二種の回向の理解に大きな共感をもちつつも、なお伝統的な理解とされる衆生が浄土へ生まれるのち再び現世へ還つて他の衆生を済度するはたらきをするということの意味を、今までは別な角度から考えなければならぬのではないかと評者が考へる所以である。

それはともかく、真宗学をめぐつてその学としての現代的展開が要望されて久しいが、今日なおその在り方について、十分な立場が形成されて久しいとはいえない。著者の本書における試みは、二種の回向をめぐつて従来の真宗学の伝統的な理解の問題提起をすることを通して、親鸞思想の新たな理解の地平を開こうとするものと言える。それは仏教の現代的覚醒をめざした清沢満之の衣鉢を継ぐものであり、またユニークな真宗学の思想を展開した曾我量深の歩みにつながるものである。往還二種の回向、選択本願の行信、無上涅槃の証、現生正定聚といった浄土真宗のキーワードが何を意味するのか、それを現代の人間の宗教的生として明らかにすることなくしては真宗学の今後の発展はありえない。本書はそうした意味で、現代の真宗学の一つの可能性を示すものであり、その新たな展開に資するところ大なるものがあると考えられる。